

グレアム・グリーンの『おとなしいアメリカ人』について

On *The Quiet American* by Graham Greene

岩崎正也
Masaya Iwasaki

1

神は存在するという表の側をとって、その得失を計ってみよう。二つの場合を見積ってみよう。もし君が勝てば、君はすべてを得る。もし君が負けても、君は何も失いはしない。⁽¹⁾

フォンへの恋をパイルとの間に賭けて負けた無神論者のファウラーは、物語の結末でフォンをとり戻すという反パスカル的なハッピー・エンディングに到達し、さらに神への信仰をも得た、と考えられる。「捲きこまれたくない」ために両陣営のどちらにも加担せず、事実だけを伝えるリポーターであることを自負するファウラーが、パイルのイノセントなテロリズムに堪えきれずにその信条を覆してパイルを裏切り、それによって起る彼の死にたいする罪の意識を告白するために神の存在を求める態度が示唆されているからである。

彼が死んでからすべてがうまくいったが、すまないと言えるようなだれかが存在すればいいのに、とどんなに願ったことだろう。⁽²⁾

賭の敗北から勝利へという二種の領域を貫く鍵は、作者が幼少年期の現実生活の中で味わった天国と地獄を結ぶ国境としてのランチャ張りのドアの変型であるサイゴンのカティナ街にあるアパートの両義性にある。「サイゴンで一番の美女」⁽³⁾である従順なフォンがいて阿片の香りのたちこめるアパートは、ファウラーを外部の8年にわたるインドシナ戦争の暴力、狂気などの死の時間から遮断し、8千マイル離れたイギリスにいる別居中の妻との不幸な過去から逃避させている点で、一時的ではあるが平穏な住居であり、外界の状況に係わ

りあうことのない孤立した閉塞的な世界である。この孤立したアパートから、論説を加えず事実だけを伝えようとする捲きこまれたくない自己の意識を通してファウラーの見た外界の風景を、ブライアン・トマスは「魅力的ではあるが、ある点では根本的に自己とは無縁の客観的な現実の眺望」⁽⁴⁾と述べている。

2

物語は、ファウラーの意識と一人称による語りを通して、自分がパイルに初めて会った年の9月から、パイルが死んだ翌年の2月までの約6か月間の出来事を、2月の現在から6か月間を遡る回想として記されている。

トマス・ファウラーは、イギリスの新聞社からインドシナ戦争を取材するためにサイゴンへ派遣された報道記者であり、パイルの死んだ2月が、彼とフォンとが初めて会ってから2年目にあたることを考えると、少なくとも2年間はサイゴンに暮らしていることになる。カティナ街にあるアパート内でのフォンとの孤立した平穏な日常は主として次の2つの外的な条件によって崩壊する危機を孕んでいる。一つは2か月後の4月に任期が終ることであり、二つ目は、ハイ・チャーチに所属しているヘレンが離婚に応じないため、フォンと結婚できない事情である。そのためファウラーの「生」はいつも不安に苛まれ、「死」によって侵触されている。なぜなら「今月か、来月か、フォンは私を棄てて出て行くだろう。来年でなければ3年後には」と「生」の崩壊を予期するファウラーにとって「彼女を失うことは死の始まりだ」からである。この不安と、『内なる人』(*The Man*

Within, 1929) の幼いときのアンドルーズが乳房と結びつく肉感的な母との関係が父の暴力により破壊されることを怖れる不安との間にアナロジ-の関係が成立する。一方、国境としてのアパートを通してフォンとの「生」の世界と対極にあるのが特派員として係わり合う戦場の「死」の世界である。ジャーナリストとしての信条は、捲きこまれないためにどちらの陣営にも味方せず、意見を述べることも一種の行動だから行動するレスポ-ンデントでもあることを避け、事実だけを伝えるリポ-ーターとして務めることである。

したがって、戦場での非アンガジェの態度は、「絶えず幸福を失うのを恐れ⁽⁷⁾」、フォンとの平安を維持するために外界とは係わらずに孤立する点で、「生」への不関与の態度と重なり合う。

ある一定の外圧がファウラーの閉鎖的な「生」にたいして加えられ、「生」への不関与の態度が崩れれば、必然的に他方の非アンガジェの態度も変化し、ファウラーの「生」は消滅する運命にある。その点で、6か月前の「おとなしい」パイルの出現はファウラーをパスカルの賭に引き出すことになる重大な事件であったはずである。

前年の9月に、アメリカ公使館の経済援助使節団員であるパイルをコンティネタルの広場に出席したとき、ファウラーは、「傲慢で騒がしく、子どもっぽくて中年の⁽⁸⁾」アメリカ人記者たちと異なるパイルの性格を職業的リポ-ーターとして次のように感知する。「パイルはおとなしく(quiet)で、謙虚に思われ、あの初めの日は彼が何を言っているかを知るためにときには身を乗りださなければならなかった。しかもたいへん真面目(serious)だった⁽⁹⁾」。この観察は、6か月後パイルが殺された後、参考人として警察本部に呼ばれたファウラーがパイルについてヴィゴ-ーに語る次の記述と一致している点でわれわれはファウラーのリポ-ーターとしての観察力の正確さを了解しなければならない。「彼なりにいい男ですよ。真面目(serious)だ。コンティネタルで騒ぐごろつきとは違いますよ。おとなしい(quiet)アメリカ人だ⁽¹⁰⁾」。

われわれはファウラーの最初の観察の中に表れたseriousとquietという語が6か月後のヴィゴ-ーへの報告の中でくり返されていることに気づくとともにseriousがパイルの理性の特徴を、quiet

が彼の感性の特徴を表すことを了解する。しかし、報告のseriousとquietは初めの観察の場合とは異なり、6か月間の認識の変化を示す語である点に着目しなければならない。半年間のつき合いを通してファウラーはパイルの理性と感性を示すためにこの2つの形容詞を次のように変化、発展させている。

quiet—modest, good, innocent, seemed incapable of harm, young, ignorant, silly, crazy, boyish

serious—punctual, absorbed, determined, got involved

パイルの経済援助の実体が不明であるうちはファウラーにとってパイルの‘quiet’はmodestであり、goodである点で周囲のcynicalな同業者たちには感じられない青春の賛美を示す用語であった。ファウラーのアパート内の平和に崩壊の兆しが現れたのは、ファウラーとフォンとが未婚であることを知ったパイルが公明正大にフォンにたいして求婚の意志を表明したときである。

ファウラーにフォンへの求愛の意思を話すために、ナムディンから独りで川を下り、ファット・ディエムの前線へ無謀な冒険を敢行したパイルは夜半、納屋の床に腰をおろして、フォンに恋したいきさつをファウラーに告げ、言い終ったからには、やがて求婚すると宣言する。「彼女は私たちのうちのどちらかを択べはいんですよ。その方が公平ですよ⁽¹¹⁾」とパスカルの賭に積極的に参加することを表明したのは、ファウラーの不関与の態度にたいして「パイルは捲きこまれるのがよいと信じていた⁽¹²⁾」からである。

一つの賭がおこなわれる。表が出るか裏が出るかなのだ。君はどちらに賭けるか?⁽¹³⁾

パイルがフォンに求婚する所は、国境としてのファウラーのアパートの部屋であり、それも当事者であるファウラーの通訳を介して、という奇妙な状況の中で行れる。ファウラーの一人称を通して語られるパイルの求婚の言葉は、彼自身ではなく、語り手自身の意志表示としてフォンに発せられる点でアパート内での三角関係の展開は笑いを含んでいる。さらにパイルがフォンに向かって

賭の対象として財産と健康とを数量として公開したときに、ファウラーの経験のシニシズムとパイルの青春のイノセンスとの間に生じた亀裂が笑いを惹き起こす。5万ドルの遺産、2か月前の健康診断書、血球数。パイルの攻勢によって賭に巻きこまれる可能性に気づいたファウラーの意識はそれを避けるために通訳者であることを拒絶する。もう一つの拒否の理由は、翌年の4月に自身が特派員の任期を終え、本社ヘリポーターとしてではなく意見を持った論説記者として戻れという電報を受取っていたという賭にマイナスのカードをすでに持っていたので、初めからフェアな勝負にはならないことを知っていたことである。フランス語を交えての英語による求婚にフォンはノーと一言答えて、笑いに幕を下ろす。「ノー」によってファウラーの理性はフォンを失わずにすんだことに救いを感じるが、感性はフォンを得たことにならない点に不安を抱いている。「行きたくありません」と言うフォンの言葉の陰に「けれども」が続くからである。

フォンの利益を、急速冷凍冷蔵庫、車、最新型のテレビ・・・というような経済的物質的な数量として考え、彼女に「喜んで宣誓する明朗な若いアメリカ市民」⁽¹⁴⁾を子どもとして持たせたいという善意と明確な良心に基づいて行動する、フェアであると同時に進んで巻きこまれる態度を共有する点で、『第三の男』(The Third Man, 1950)に登場するアメリカ兵オブライエンはパイルの先輩であると言うことができる。

3

第二次大戦後の英米仏ソの四大国地区に分割され、市の中心部を共同管理下におかれたウィーンでアンナ・シュミット事件が起る。インネル・シュタットに関してソ連が議長を務めていた2月に、ソ連憲兵のパトロール・カーがアンナの逮捕に向かう。アンナの部屋で主人役のソ連兵はアンナが着替えをしている間も忠実に看視する。オブライエンはアンナをソ連兵と2人だけにしておかず、「騎士のように背を向けて立っていたが、あらゆる動作を意識していたに違いない」⁽¹⁵⁾。フランス兵は衣裳だんすの鏡に映る女の着替えを眺めている。

イギリス兵は打つべき先の手を考えて廊下にいた。アンナのアパートへ来る途上、車がイギリス地区に入ったのに気づかないイギリス兵スターリング伍長に向かい、アンナの逮捕容疑に疑惑を抱いているオブライエンはアンナから書類を取りあげたソ連兵に返すよう抗議する。車がアンナを乗せて司令部へ戻るときにも、オブライエンはソ連地区へ車が向かおうとするのを知り、ソ連兵に抗議をくり返す。そして脅えているアンナにたいし、「おれがあいつらに仕返しをしてやるよ」⁽¹⁶⁾と言い、スターリングにたいしては「あの娘を保護してやらなければ」⁽¹⁷⁾というふうに、自己の正当な動機にたいし‘serious’であり、積極的に巻きこまれようとする点でオブライエンの態度は中世騎士道のパロディとして描かれている。

この物語は、イギリス人のキャロウェイ大佐の視点から一人称の語りを通して記される。英米仏ソの4人の兵士はそれぞれの性格、行動について均等なスペースを割いて描かれてはいるが、キャロウェイが目にするのは部下のスターリングとアメリカ兵のオブライエンとの対比であるので、固有名詞はこの2人にしか与えられていない。

『おとなしいアメリカ人』が発表された当時、その政治的意図をめぐってイギリス、アメリカで激しい議論が展開された。トマスは「論争はパイルにたいするファウラーの敵意と究極的にはアメリカにたいするファウラーの軽視がグリーン自身のものであるのかどうかという疑問に関連していた」⁽¹⁸⁾と述べている。1945年9月から54年7月までの9年におよぶインドシナ戦争の期間に、グリーンは50年から55年にかけて4回インドシナを訪ねている。初回の50年の訪問の目的はハノイで領事をしている友人に会うためだったという。

『おとなしいアメリカ人』の着想が閃いたのはルロイ大佐と一晚を過した後サイゴンへ車で戻る途中だった」とグリーンは語り、パイルのヒントをその一夜をともに同じ部屋で過した相手のアメリカ人経済援助使節団員から得たことを述べている。作者が「おそらく『おとなしいアメリカ人』にはこれまで書いたどの小説よりもルポルタージュが直接的に表れている」⁽¹⁹⁾と言うように、ファウラーのリポーターとしての観察の多くは作者の体験から引用されている。たとえば、ファウラーが

中尉に率られたパラシュート部隊といっしょに夜間作戦に加わったときに溝の中に見た女とその子の死の風景は、作者が外国人パラシュート部隊といっしょにファト・ディナム周辺のパトロールに参加したときの記事であり、またトルーアン大尉との爆撃行はヴェトミン地区への急降下体験に基づいている。

戦時下のヴェトナムで旅行者としてまた特派員として死の風景を見たときの作者の意識の中に次のようなファウラーの非アンガジェのヒントを伺うことができる。

- (1) 「死の支配する地域に一介の非戦闘員旅行者として自分がある場合、わたしはいつも一種の罪の意識をもつ」のは「暴力の窃視者のように感じる」からである²⁰。
- (2) グリーンはカトリック教区ビュイ・チュの大聖堂で行れたミサにただ1人のヨーロッパ人として出席して、感動する。「ヨーロッパはなくともキリスト教は存続できる。なぜ民衆を信頼しないのか？」²¹
- (3) 「丘をのぼり、わたしはバゴダへ入ったときいつもするように仏陀に祈っている自分をみいだした」²²
- (4) グリーンがリベリアを旅行したとき、「原始」の風景から遠ざかるにつれ、「文明」の風景はじょじょに近づいてきたという。

アフリカの小屋→グランド・バッサの貿易商の住居→モンロヴィアの領事館→貨物船→イギリス

グリーンが望んでいたのは国境を取り除いたあとの「原始」と「文明」の二種の風景の直接的な対比であったが、インドシナでは、1世紀を隔てたビエンチャンとサイゴンはその二種の風景の対極だった²³。

- (5) 「しかし、今晚の酒場は、罪のないアメリカ人の声のみいたずらに高く、それこそは最悪の不穏事なのだ」

「アメリカ経済使節団の一員にわたしは言ってみた。この戦争へのフランスの参加は終りに近づきつつあるのではないかと。『そんなことはできませんよ。フランスはわれわれに借りを返さなくてはならんですからね』」²⁴

- (6) ヴェトナム人から、独立を得ていないのに、

この戦争にどうして戦えるかと聞かれたグリーンはこの戦争が現実の戦場での「死」を見たことのない人々の間で解決されることを予知し、また、ハノイの空港へ降り立つヴェトナム傷病兵は英雄としてではなく犠牲者として迎えられる点にヴェトナム人の挫折を感じる²⁵。

- (7) 戦争の解決策はヴェトナムの完全独立であることを予感している²⁶。

1946年から54年の8年にわたるインドシナ戦争にアメリカはフランスにたいし26億3,500万ドルの援助を与え、これはフランス全戦費の30%余に当るといふ²⁷。

沖縄がアメリカ施政権下にあった日本でも、『おとなしいアメリカ人』の制作意図をめぐって知識人の間で議論が行われた。武田泰淳は「グリーンは『おとなしいイギリス人』を書くべきだった」と言い、阿部知二は「アメリカ人はそれほど『不愉快』にならなくてもいいのではないか²⁸」と述べている。『おとなしいアメリカ人』を「物語であって歴史書ではない²⁹」として読めば、ドナルド・キーンの「記者のシニズムには下向きつつあるヨーロッパの長い経験に基いた知恵が現われているが、アメリカ人の理想主義は幼稚なそして有害なものであるとしても、不安げにアメリカ人をながめるこの知恵もまたいかに不毛であるかがわかる³⁰」と言う批評は、『地図のない旅』(Journey Without Maps, 1936)、『掟なき道』(The Lawless Roads, 1939)、『英国が私をつくった』(England Made Me, 1935)などの作品にあるヨーロッパ文明の衰退と墮落をこの作品の結末でのファウラーの罪の意識の中に読みとったものとして注目すべきである。

グリーンは1952年2月ヴェトナムからアメリカに向かう途中日本に寄ったが、マッカラン法によって入国を拒否され、またアメリカでも同じ理由で入国を断られている。3年後に出版された『おとなしいアメリカ人』の主人公パイルの‘quiet’が持つ両義性に、ファウラーの眼を通してグリーンのアメロ批判を見ることは可能であろうが、この入国拒否以前に、1950年出版の『第三の男』に出るアメリカ兵オブライエンがすでにパイルの先駆者として‘quiet’の二重性であるchivalryと「捲

きこまれる」態度とをもつ人物として描かれていることは、グリーンのアメリカ人観が入国拒否の前後とで基本的に変わっていないことを示している。

4

ファウラーは、パイルとの賭に敗北を予想したが、「老年は性のゲームでは若さと同じくらい強い切札³²⁾」であることを自負しているので、本社宛てに在任期間延長の申請をするとともに、妻にたいし離婚承諾を要請する。しかし、パイルの関与の態度によってファウラーの「生」が侵されるに比例して戦争の「死」に向き合う非アンガジェの態度もしいに侵蝕されてくる。ファウラーがファット・ディエムの前線で十数人のパラシュート隊に合流したとき、指揮者の中尉がヘルメットを脱いで彼にすすめるると彼は「それは戦闘員のためのものです」と言って被ることを拒む。それは、ファウラーが非アンガジェである態度を表明しなかったからである。一行の行手を遮る運河には死体が充満している。また農家に近い溝には女と男の子の死体があった。中尉は「不運だった」と言い、ファウラーは「戦争はいやだ」と思う。ファウラーとパイルが乗った車はティエンのカオダイ教の祝典からサイゴンへ帰る途中、ヴェトナム地区に入ったところでガソリン不足のために止まる。その夜を看視塔の上で2人のヴェトナム少年兵とともに過ごした後、ヴェトミン兵の襲来により、ファウラーとパイルは、少年兵を残して稲田の中へ隠れる。ファウラーは跳び下りたとき左足の踵を痛め、直後バズーカ砲弾の炸裂によって左脚に負傷する。

水田に横たわるファウラーは、仲間を殺された少年兵の泣き声を聞き、先日、溝の中に見た子どもの死を憶い起して「子どもを捲き添えにして戦うべきではない³³⁾」と悩み始める。パイルが外人部隊のパトロール隊員を連れ戻すために独りで出かけた後、再び看視塔の残骸から聞こえてきた少年の苦痛の泣き声が、「暗闇の中で泣いているあの声に私は責任がある³⁴⁾」というふうにそれまで誇りにしてきたファウラーの非アンガジェの態度を揺り動かす。このとき、神にたいして「私を死なせ

るか気絶させてください」と少年兵の苦痛の責任をとろうとするファウラーの意識の上に、非戦闘員としてヴェトナムを旅行するグリーン自身の罪の意識を重ね合わせることができるだろう。パイルが経済援助と称する第三勢力が惹き起すテロリズムが2度作品の中で扱われる。テエ將軍が仕掛けた「自転車爆弾」事件とプラスチック爆弾事件とであり、前者のときは人身被害はないものの、後者の場合には昼どきの広場での爆発が多数の死傷者を出す。パイルの捲きこまれたという‘serious’の態度によって惹き起された赤ん坊の死と、首のない輪タクの車夫の死の風景と、血に濡れているとも気づかず、汚れた靴を見て気味悪³⁵⁾がって、「公使に会う前に靴をきれいにしなくては³⁵⁾」と言う‘innocent’の態度との認識の落差にファウラーの非アンガジェの信条は一瞬のうちに変化する。

前者の爆発事件の後、ファウラーは、プラスチック爆弾を造る装置が隠されているモイ氏の車庫を訪ねてからアパートへ戻ったときに、これまで侵されまいと努めてきた「生」が崩壊したのを知る。フォンが家財道具を持って引越していたからである。このようにしてフォンを失うことによってファウラーは死が始まったことを意識する。

これ以後、物語が、アパート内の平和な「生」を奪われたファウラーが、バスカルの賭の論理と認識に従って、非アンガジェの態度を棄て、パイルを裏切る役割を引受けることによって、それまで無意識の中に感知した自己の死を意識の上に成就する、というように展開するプロットには『内なる人』のアンドルーズが自己を殺すことによって内なる父への復讐を完了するというモチーフが再現されている。パイルを裏切り、その罪の意識を告白すべき神の存在を烈しく希求する結末に、ファウラーが神を得た、少なくとも意識が神の存在に収斂される可能性を見出したと言うことができな

5

パイルが死んだ夜、アパートへ戻ってきたフォンを迎えて物語はハッピー・エンディングに終る。しかし、賭に負けてすべてを貰うというファウラーの「生」は、すでにアンガジェを信条としたか

らには以前の平和な「生」とは異なり、「死」を通過した後の、「生」の転化した位相である再生に到達する。ファウラーのハッピー・エンディングは密使Dの場合と同じく新たな不安に脅かされ続けるに違いない。

(1989. 1. 31 受理)

註

- (1) 松浪信三郎訳「パンセ」(1971; rpt. 『デカルト・バスキアル』筑摩世界文学大系19、筑摩書房、1975), p. 196.
- (2) Graham Greene, *The Quiet American* (1955; rpt. London: The Bodley Head, 1973), p. 211.
- (3) *Ibid.*, p. 39.
- (4) Brian Thomas, *An Underground Fate* (Georgia: The University of Georgia Press, 1988), p. 33.
- (5) Graham Greene, *The Quiet American*, p. 42.
- (6) *Ibid.*, p. 83.
- (7) *Ibid.*, p. 42.
- (8) *Ibid.*, p. 15.
- (9) *Ibid.*, p. 24.
- (10) *Ibid.*, p. 10.
- (11) *Ibid.*, p. 59.
- (12) *Ibid.*, p. 23.
- (13) 松浪信三郎訳「パンセ」, p. 196.
- (14) Graham Greene, *The Quiet American*, p. 148.
- (15) Graham Greene, 'The Third Man' (1950; rpt. *The Third Man and Loser Takes All*, London: The Bodley Head, 1976), p. 91.

- (16) *Ibid.*, p. 93.
- (17) *Ibid.*, p. 93.
- (18) Brian Thomas, *An Underground Fate*, p. 26.
- (19) Graham Greene, *Ways of Escape*, (London: The Bodley Head, 1980), p. 164.
- (20) 田中西二郎訳『コンゴ・ヴェトナム日記』(早川書房, 1982), p. 112.
- (21) *Ibid.*, p. 118.
- (22) *Ibid.*, p. 125.
- (23) Graham Greene, *Ways of Escape*, p. 174.
- (24) 田中西二郎訳『コンゴ・ヴェトナム日記』, p. 134.
- (25) *Ibid.*, pp. 138-140.
- (26) *Ibid.*, p. 148.
- (27) 日本大百科全書第2巻(小学館, 1985), p. 819.
- (28) 武田泰淳「『おとなしいアメリカ人』を読んで」(毎日新聞, 1956), p. 6.
- (29) 阿部知二「『おとなしいアメリカ人』を読んで」(毎日新聞, 1956), p. 6.
- (30) Graham Greene, *The Quiet American*, v.
- (31) ドナルド・キーン「『おとなしいアメリカ人』を読んで」(毎日新聞, 1956), p. 6.
- (32) Graham Greene, *The Quiet American*, p. 69.
- (33) *Ibid.*, p. 117.
- (34) *Ibid.*, p. 124.
- (35) *Ibid.*, p. 182.